

三・三寅劍出現

次に私の故里が全國的に注目されたのは、秩父国民党騒動から百十一年の歳月を隔てた、平成六年一月十日のことで、私はこのニコースを現在の住いの兵庫県で知った。

その日の読売新聞の朝刊には、「国宝級 聖徳太子の剣に匹敵」と言う大見出しで、次の通り報じられていた。

「長野県小海町の旧家に伝わる刀剣が、仏像や梵字、星座の模様を刻んで金銀をはめ込んだ『象嵌』と呼ばれる技法の、白鳳・奈良時代の第一級の作品である事が九日、水野正好奈良大学教授を代表とする調査検討委員会の鑑定で明らかになった。

仏像が象嵌された刀剣の確認は全国でもはじめて。金銀両方を使いこれだけ多種多様なモチーフを象嵌した裝飾刀剣は過去に例がない。聖徳太子の剣として知られる国宝『四天王寺の七星剣』などに匹敵する貴重な発見で、当時の海外文化の受容の形態と宗教観を端的に物語る資料として、学会の注目を集めている。

刀剣は、長さ三十三・五センチ、刃渡りに十五・四センチで、最大幅は一・八センチ、厚さ六ミリ。剣の形や仏像の表現方法などから七世紀末から八世紀の制作と見られる。最大の特色は仏像画。両面に四天王のうちの『毘沙門天』と『持国天』と見られる像

が確認された。高さは何れも五センチで、顔の輪郭やよろいなど目立つ線は金で、他の細部は銀で象嵌されている。このほか切つ先に近い部分には残る『增長天』と『広目天』の像があつたと推定される。

背の部分には『三寅劍(さんいんけん)』と剣名が象嵌されている。三寅とは中国の古代思想に言つトラ、ヒョウ、ネコのことで、『人を害する三寅を収める力を持つ劍』との意味が込められており、魔よけの剣として用いられたらしい。これまで剣名が判明した刀剣は、奈良県・石上神宮の国宝『七支刀』だけ。

また、剣の中央には『梵字真言』と見られる九文字の梵字が、反対の面には、北斗七星と三台・三公と呼ばれる三種類の星座が認められる。

仏像と梵字は仏教、星座や剣の名は道教にそれぞれ関係があり、奈良時代の思想や宗教觀が伺える資料。また、金と銀を巧みに使い分けた象嵌裝飾は『正倉院所蔵の優れた刀剣以上』とされ、かなり高い身分の人物が所有していたと考える。

朝鮮半島か渡来人が国内で作つた可能性が強い。刀剣は同町松原の農業畠山さんが所有しており、何時から伝わったか不明と言つ

「」に出てくる奈良県の石上神宮の七支刀とは、剣の先が七つに枝分かれしており、

諸説はあるようですが、その刀身に、「秦始四年（468）に百濟王が鍛えぬいた鋼の七支刀を造つて、倭國の王（雄略帝）に送つた」という意味の刻印がされているもので、石上神宮に伝えられている宝剣である。

石上神宮と言つるのは物部氏が祭られている神社で、奈良県天理市の中日本最古の道といわれる山野辺の道の近くにある。

物部氏は、用明二年（587）に仏教導入を巡つて蘇我馬子に滅ぼされた古代の豪族で、その祖は饒速日命（にぎはやひのみこと）とされている。一説によると饒速日命は、いわゆる天孫降臨族とは別に大和国に降り立つた神で、鍛冶神の祖神の一つであるとされている。即ち武器や金属加工に長けた一族と言う事で古代国家の軍事を司る立場にあり、その後、仏教の導入を巡つて蘇我氏との権力争いに敗れて物部宗家は消滅した事になっている。

（中略）

そこで、我が「三寶劍」であるが、新聞記事によると「白鳳・奈良時代の第一級の作品」

と言う事である。白鳳時代とは大化の革新(大化二年=646年)から平城京遷都(和銅三年=710年)までと言う事で、七支刀や稻荷山鉄剣から百年程後と言つことになる。

また、白鳳時代と言つのは、わが国が神話の時代から国家としての形が出来た時代で、言わば国家としての花が開花した時代である。このことは勿論、三寅剣に刻まれている内容からも仏教思想が色濃く表されて、技巧的にも優れている事からも明白である。

ところで、考古学者であり、文化勲章受賞者の末永雅雄博士によると、一般に、剣とは両刃で真直ぐな刀物を言い、刀は刃が片刃で多少湾曲のある刀物を指すことになつてゐることに對して、「日本古典で見ると、記・紀では刀、剣身の形態的区分はしていない。ただ記には刀、紀には剣の用字例の多いことが目に付く。東大寺献物帳に、片刃は大刀、両刃は剣と區別した記帳がある。」

以後、平安時代から近世まで、剣と呼ぶのは貴族的、もしくは貴重性の名称となり、儀杖剣は原則的に片刃で、切つ先は両刃が多かつた。公家は朝廷の儀式に参列の際、身分を表した飾剣、かざり太刀を佩用し、武家の戦闘用大刀と區別したので、この場合、剣の名は貴族的なものとして取り扱われた。」と説明されている。(毎日新聞)昭和54年1月19日「稻荷山剣と杖刀人」

見つかった三寅剣を写真で見る限り、片刃かどうかは定かではないが、直刀であり、

刀身に彫刻を施していると言つ事は、武器としての実用剣ではなく飾剣と言つことになる。

遠く、白鳳の時代に山深き里に飾り太刀を佩用する高貴な人がいて、どのような高雅な文化が花開いていた事になるのだろうか。これほどのものが何故、然したる神社仏閣はおろか、神樂や祭囃子さえない山村で発見されたかと言う事になる。

発見された旧家と言うのは、小海町松原で代々神官の家系であつた畠山家と言うことであるが、この松原地区には畠山姓は何軒もあり、「松原湖の湖底に畠山重忠の母親の墓がある」など、この松原と言う土地は昔から様々な伝説の多いところで、私の子供の頃から聞かされていた。

湖畔にある小海町の看板には次のように示されている。

「昔、源頼朝がらい病にかかつた時、龍の生肝を飲めばよいという神のお告げが夢に現れ、頼朝は畠山重忠に龍の生肝を取つて来いと命じた。

重忠はどこへ行けば龍がいるかわからないので困つたが、ある夜の夢に信州松原湖にすむ龍の生肝を取るがよいと教えられ、来てみると、松原神社から弁天島へ下る大弥太坂で母に行き会つた。重忠は母に頼朝の命を話すと『私が湖中にはいつて蛇体になるから肝を取つて主君に奉れ。』といつて入水した。たちまち水面に水柱がたつたと見る間に

大蛇の姿が湖上に現れた。重忠は、今はもう躊躇する時ではないと、ついに之を殺して生肝を取り頼朝に差上げ、頼朝は病気がたちまちなあつたので、湖畔神光寺の境内へ重忠の母のために五重塔を建てて供養した」と言う事である。

延文元年（1356）諏訪大社の最も古い資料、「諏訪大明神絵詞」には諏訪明神は竜あるいは大蛇の姿であると隨所にかかれているそうで、はたして三寅剣と松原の伝説どこのように結びつくのだろうか。

故里を離れて半世紀、幼い頃の記憶や伝承を頼りに、暇老人の暇に任せて三寅剣の謎解きに挑戦してみる事にした。